

たまがわ やき えの もと し すい  
玉川焼と榎本紫水

(稲城市指定文化財)

稲城市東長沼2111  
☎0423-78-2111  
発行 1996. 2.20



玉川焼の抹茶茶碗

坂浜の高勝寺近くにある榎本茂樹家では、江戸時代後期にこの地で焼かれた「玉川焼」と呼ばれる陶器を所蔵しています。榎本家は坂浜村で代々農業を営む家でしたが、初代理兵衛（元禄年間の人）の頃から、農閑期に付近の粘土どびんを使って土瓶どびんやすり鉢などの雑器を焼いていたと言われ、「どびんや」という屋号で呼ばれていました。その四代目に当たる利兵衛は、瀬戸・京都方面に陶芸の修業に出て、この地方の陶器づくりの技術を身につけ、天保5年（1834）に坂浜村に帰って、稲城の地で陶器づくりを始めました。その後利兵衛は、玉印を商標とする玉川焼をつくり始め、盛んに商売を行いました。彼は榎本紫水とか調布軒紫水という号を使っています。



玉川焼の宣伝用チラシ

榎本家に残っている玉川焼宣伝用の木版刷りのチラシによると、大丸瓦谷戸あたりの粘土かわらがやとで焼きはじめ、国分寺瓦にある「玉」の刻印（多摩郡の意）をとって商標としたことがわかります。また当時は、玉川焼のにせ物が多く出回っており、榎本家のものが元祖であることが記されています。宣伝文の中には、榎本家への道案内図が描かれています。

榎本紫水が没したのは慶応元年（1865）のことですが、紫水の息子も榎本紫水の名前を名なのっており、玉川焼自体は明治時代中期頃まで出回っていたと考えられます。しかし明治期の作品は、

諸国の陶器を模倣したようなものが多く、初代の紫水の作品の方が優れていると言われます。

現在榎本家に残っている玉川焼はいずれも楽焼きで、抹茶茶碗、香合、水差し、小皿、刻印、原型、匣鉢、木製のフイゴなどがあります。抹茶茶碗はもっとも数が多く、遺作の中心をなすものですが、中でもジャカゴと布晒しの模様てつえの鉄絵の茶碗（表紙カラー写真の中央の作品）は代表的な優品です。香合では五角桔梗型ききょうのものが代表で、青磁風せいじふうの作品です。また亀形香合や呉須絵ごすえの丸香合などもあります。他には作品をつくる時に使った鶴・松・唐草紋などの原型、作品をつくる窯で使われた匣鉢と木製のフイゴなどがあります。

榎本家以外にも優品が残っています。坂浜の加藤誠家に所蔵されている天保5年銘とうの陶額は、紫水自筆の銘があり、修業に出ている紫水が天保5年の冬に坂浜村に戻って窯業に従事し始めたことがわかります。玉川焼の製作年代を知る貴重な作品です。東京国立博物館には白と砧うすを呉須で描き、低温で焼き上げた白釉きぬたの最中香合が残っています。この作品の箱書には、榎本紫水銘と玉印らっかんの落款が記されています。また赤楽焼の大型の獅子形香炉は、力強く作られた優品で、流出が惜まれます。

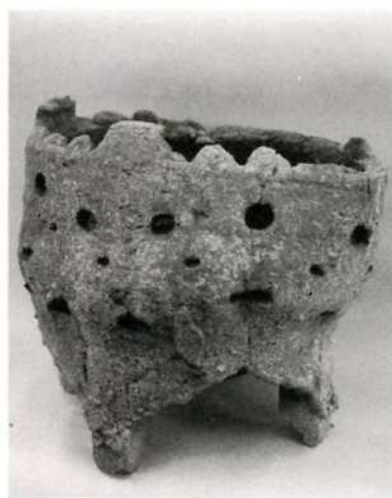
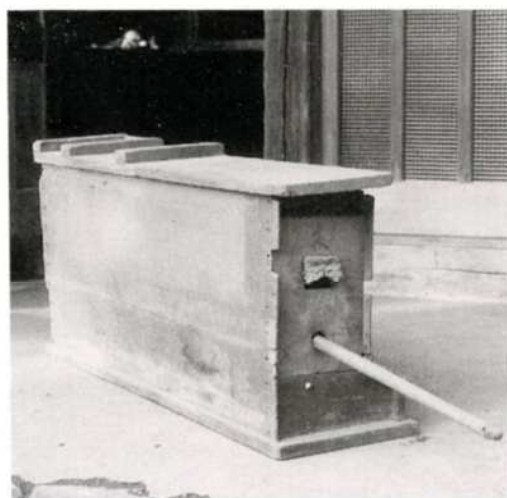
海外に流出した玉川焼も知られています。それは近代考古学の基礎をつくったことで知られるE・S・モース博士がアメリカに持ち帰ったもので、現在アメリカのボストン美術館に5点の玉川焼が収蔵されています。収集品カタログを見ると、大型の獅子形香炉1点、抹茶茶碗2点、香合2点が掲載されています。



天保5年銘の陶額（加藤誠家所蔵）



結び文形の水差し



玉川焼製作に使われたフイゴと匣鉢さやばち



モース博士の収集品  
（中段の左側5点が玉川焼）



大型の獅子形香炉（所蔵者不明）